

ノートがいざなう異国の旅

次に参加した野村栄三郎と橋本超
だ。8月7日にウランバートルを出
発し、9月21日にホブドに到着。52
日間の旅であった。

探検隊はシルクロード調査で有名
だが、1996年出版の『新西域記』
に収められた野村の日記『蒙疆新
旅行日記』は、半分以上をモンゴル
高原の横断日記に割く。野村が感じ
たみずみずしい感情、旅の合間のモ
ンゴル語の学習、モンゴル人少女へ

相馬 拓也氏



そうま・たくや 1977年生まれ。専
門は人文地理学、生態人類学、動物行
動学。中央ユーラシアで牧畜社会、農
山村を中心に人と動物の関係を調査
・研究。著書に「驚使いの民族誌」。

の馬にも似た感情、かつての愛馬
に似た馬との邂逅、荷ブタの逃走、
手数料などをふっかけられたこと、
地元ガイドの怠情、発掘不許可への
憤激…を赤裸々に記す。詳細な「フ
ールドノート」を残してモンゴル
高原を旅した人物は、世界でも野村
栄三郎が初めてだった。

仏教の来た道求めた野村と橋
の旅路と、中央ユーラシアで躍起にな
って野生動物の研究を進める筆者の
フィールドワークは、多くが重なっ
てみえる。筆者がモンゴル西部のカ
ザフ遊牧民と暮らした450日間を
記録したフィールドノートには、失
敗や葛藤や憤りの感情とささやかな
成功体験が書きなぐってある。

フィールドノートを書く時、また
読み返す時、調査地でのつらさを忘
れて自分自身に静かに深く、向き合
えた。野村のノートに書き連ねられ
た体験は、100年もの時代を超え
ても共有できる価値があり、感情を
同じくすることができる。

2019年夏、「野村ルート」を

実際に旅した。自動車でも5日間を
要する1500kmの道のりだった。
日記に記された滞在地、景色、地名
に沿って進んだ。地名の多くが消滅
しており、頼りは地元の高老や遊牧
民の記憶と伝承による導きだけだっ
た。それだけに日記に記述された通
りの地物や地名の発見は代えがたい
喜びと興奮であり、野村の道をもた
る巡礼のような追憶の旅路だった。

フィールドワークは、覚悟と忍耐
で成長の体感値をもたらす数少ない
特別な旅路なのだろう。ほぼすべて
が卓上のデジタルで完結できる現代
社会では、得ることが難しい。

長引くステイホームや渡航制限の
なか、時が流れても、デジタル化が
進んでも、わき上がってくる人間の
欲求にふと気づく。それは「旅のな
い暮らしはつまらない」である。

(京都大白眉センター特任准教授)

2019年10月18日
付以降の連載は下のQR
コードからご覧いた
だけます。

